

『列女傳』の研究

一

『列女傳』は、前漢の劉向（前七九〜八。一説によると前七七〜六）によって編纂された書で、後世の『女誡』『女論語』『内訓』などの婦徳を称える教訓書の原点とされている。

その構成は、卷一 母儀伝、卷二 賢明伝、卷三 仁智伝、卷四 貞順伝、卷五 節義伝、卷六 辯通伝、卷七 孽嬖伝の七篇から成り、一つの篇はそれぞれ十五の伝から成る。（母儀伝は一伝を欠く。）各伝の終りには、「君子曰」で始まる君子賛と、『詩経』を引用した詩賛、及び、頌（人君などの盛徳成功などを褒め称えるもので、韻を押む）が添えられている。頌はもともと一篇としてまとめられていたが、後に王回という人物によって各伝の最後に付され、現在見られるような形に改められた。

『列女傳』作成の動機は『漢書』楚元王伝に見られる。それによると、元帝の頃から、天子の後宮は奢侈・淫乱となり、その悪風は臣民の家庭にも広がっていた。成帝期には、皇太后王政君の兄・陽平侯王鳳率いる外戚一族

浅川 房代

が政治を専横し、また、趙飛燕・昭儀姉妹や衛氏の姓を賜った李平が、微賤の出でありながら天子の寵愛を受けて高い位につき、礼をわきまえない行いをするなど、後宮の乱れは更に激化していった。そこで漢室の存亡を憂える劉向は、「王者の教化は内（後宮）より外（天下）に及び、近い者より始められる」と考え、詩書の中から模範となる賢妃・貞婦の話、及び國を乱し滅ぼした孽嬖（寵妾）の話を採用し、『列女傳』を作って、天子を戒めたとある。

しかし、「採取」といっても、原典をそっくりそのまま採取したのではなく、その話の素材を用い、それを発展させて、間接的に劉向の思想を語っている。そのため、史実とは異なっている話もたくさんあるが、それは、劉向が誤って原典を採用したのではなく、己の思想をより効果的に表わすため、主人公をより印象強くするために、意図的に創作したものと思われる。

『列女傳』の典拠になったと思われる文献に関しては、下見隆雄氏の著書『劉向『列女傳』の研究』に詳しく述べられており、主なものだけでも、『史記』『左傳』

『公羊傳』『穀梁傳』『國語』『戰國策』『毛詩』『韓

詩外傳』『禮記』『論語』『孟子』『荀子』『韓非子』

『尚書』『呂氏春秋』などが原典として挙げられている。

史書や、儒家に属する書を中心にしながら多分野に渡っており、劉向の学識の広さがうかがえる。

その中で、下見氏の分類で比較的関連が密接なものが多く、また、劉向が詩贊の形式を借りたと思われる『韓詩外傳』が注目される。本稿では、『韓詩外傳』と『列女傳』との比較から『列女傳』の文章の特徴を考察してみたい。

二

『列女傳』の全百四伝のうち、『韓詩外傳』が典拠の中心だと思われるものは、次の十伝である。

卷一—十一 鄭孟軻母 『韓詩外傳』卷九—一、十七

—十四 齊田稷母 卷九—二

卷二—五 楚莊樊姬 卷二—四

—十三 楚接輿妻 卷二—二十一

—十五 楚於陵妻 卷九—二十三

卷三—十三 魯漆室女 卷二—二

卷四—一 召南申女 卷一—二

卷五—十一 魏節乳母 卷九—六

卷六—三 晉工弓妻 卷八—二十六

一六 阿谷處女

卷一—三

(ただし、卷一—十一 鄭孟軻母については、四話あるうちの第二話と第三話のみ。)

卷七『雙伝』を除いては、全ての篇にわたって『韓詩外傳』を典拠としている伝が見られる。部分的に『韓詩外傳』を引いているものは更に十数伝あるが、ストーリーの関連が深い十伝のみを扱うものとする。『韓詩外傳』との比較から得られる『列女傳』の全体的な特徴としては、

- 1、固有名詞の置き換えが多い。
- 2、強い印象を与えるように主人公の描き方を工夫している。
- 3、説明や例が補われており、『韓詩外傳』に比べ文章が長くわかりやすい。

といった点が挙げられる。

以下、それぞれの特徴について例を挙げながら述べていく。なお、『列女傳』は蕭道管撰『列女傳集注』(原名『集解』)を底本として用いた『劉向『列女傳』の研究』のものを、『韓詩外傳』は『四部叢刊』所収のものを用いた。

特徴1について

十伝の中で、人物名・国名などにかかわらず固有名詞の置き換えのあるものは七伝である。それらを表にまとめてみる。

	列女傳の記述	韓詩外傳の記述
齊田稷母	田稷子 宣王	田子 王
楚莊樊姬	國名を齊と明記 虞丘子	沈令尹
楚接輿妻	淮南	河南
楚於陵妻	於陵子終 楚王	北郭先生 楚莊王
魯漆室女	魯監門之女嬰	魯漆室邑之女
召南申女	召南申女	行露之人
晉工弓妻	繁人之子	蔡人之子
	晉平公	齊景公

なぜこのような固有名詞の置き換えがあったのか、誤って採取したのか、それとも何か意図があったのか、それらを考察することはできなかった。しかし、女性の礼節を説くことを目的とする教訓的な書『列女傳』において、それが事実にもとづく記述であるのかどうかという詮索は、それ程意味あることではないように思う。劉向自身も、事実を書き残そうとして『列女傳』を編纂したわけではないからである。

特徴2について

主人公の描き方の工夫として特に目立つのは、主人公の女性の言葉の改変である。『列女傳』では各伝の中には必ずと言ってよいほど伝の中心をなす主人公の言葉が

見られる。『韓詩外傳』には全くない場合でも、新たに創作して付け加えている。それは、ときには夫に対する説得であったり、ときには王に対する諫言であったりと様々であるが、形は変わっても、いずれも彼女たちがその言動の拠り所とする礼節や思想がその中にはじみ出ている。

有名な孟母断機の話（鄒孟軻母）を見ると、『韓詩外傳』では単に「其の母 刀を引きて其の織を裂き、此を以て之を誠む」とあるのを、『列女傳』では織を裂いた理由を孟子が問い、それに対して「子の學を廢するは、吾の斯の織を断つ若きなり。夫れ君子、學以て名を立て」と孟母が答える形で、君子の生き方を諭すように変えられている。

主人公の言葉の中では、過去の例を引き合いに出したり、名文句を引用したりして、その言葉に説得力を持たせると同時に、彼女たちの聡明なさまを示している。例えば、楚於陵妻では『論語』の「樂しみ亦た其の中に在り」が、召南申女では『易』の「其の本を正せば、則ち萬物理まる。之を蒙蔽に失すれば、之を千里に差ふ」がそれぞれ主人公の言葉の中に引用されている。

また、主人公と他の登場人物とを対比させたり、その篇にあったふさわしい話になるように、設定を変えたりといった工夫によっても、主人公を強調している。例えば、仕えていた魏國が破れても、忠を守って死ぬまで自分の

役割を果たそうとした魏節乳母の話では、同じく魏に仕えていながら、破れた途端に魏に見切りを付けた故臣を新たに登場させることにより、乳母の忠誠を一層印象強いものになっている。このように設定を変えたり、主人公との対比をさせたりしている例として、鄒孟軻母・楚接輿妻・魯漆室女が挙げられる。

特徴3について

概して『列女傳』のほうに記述が詳しく、わかりやすい文章であるということが言える。劉向は原典を取り入れる際、紛らわしかったり、難解だと思われる表現には言葉を補って説明を加えたり、表現を変えたりして、わかりやすい文章に書き変えている。また、具体的な例を次に示すことによって、わかりやすい文章に書き換えて、逆に、重複がある場合にはそれらを削って、より優れた文章にしている。

例えば、楚於陵妻では、『韓詩外傳』の「與物無治也（物と治無からんや）」を「非與物無治也（物に與いて治無きに非ざるなり）」に変えている。「非與物無治也」は解し難いが、今、「諸物に困まれながらの暮らしにおいて、平静状態に無いことはない」と訳しておく。『韓詩外傳』の「與物無治也」とは全く逆のことを言っているように見える。おそらく劉向は『韓詩外傳』の「也」は反語で「どうして平静状態に無いことがあろうか（いや平静状態にあるのだ）」と訳し、この反語を反対の意

味にも取れる紛らわしいものと考え、分かり易くするために「非」を加えて二重否定の形に変え、更に「與物」の具体例としてその次に「左琴右書（琴を左にし書を右にして……）」を示しているのではないかと思われる。

さらに『列女傳』では話の結末がきちんと述べられており、それぞれの伝が良く整えられているといえる。國の行く末を憂え嘯く魯漆室女の話では、「三年にして、魯果して亂れ、齊・楚之を攻む。魯連に寇有りて、男子は戰鬪し、婦人は輶輸して、休息するを得ず」という文章を付け加え、漆室女の心配した通りになったという結末を示して彼女の遠き憂いを称えている。

三

『列女傳』と『韓詩外傳』を特徴ごとに比較してきたが、「楚莊樊姫伝」に注目し、さらに詳しく比較してみたい。まず、それぞれの文章は、次の通りである。

（『列女傳』卷二一五）

樊姫は、楚の莊王の夫人なり。莊王位に即き、狩獵を好む。樊姫諫むれども止めず。乃ち禽獸の肉を食はず。王過を改め、政事に勤む。

王嘗て聽朝し、罷ること晏し。姫殿を下り迎へて曰く、「何ぞ罷ることの晏きや。飢倦無きを得んや。」と。王曰く、「賢者と語りて飢倦を知らず。」と。姫曰く、

「王の謂ふ所の賢者とは何ぞや。」と。曰く、「虞丘子なり。」と。姫口を掩ひて笑ふ。王曰く、「姫の笑ふ所は何ぞや。」と。曰く、「虞丘子 賢は則ち賢なり。未だ忠ならざるなり。」と。王曰く、「何の謂ぞや。」と。

對へて曰く、「妾 巾櫛を執ること十一年、人をして鄭・衛に之きて、美人を求めて王に進め遣む。今、妾より賢なる者二人、列を同じくする者七人。妾豈に王の愛寵を擅にするを欲せざらんや。妾聞く、堂上女を兼ねるは、人の能を觀る所以なりと。妾 私を以て公を蔽ふ能はざるは、王の多く見て人の能を知ることを欲すればなり。

今、虞丘子 楚に相たること十餘年、薦むる所は子弟に非ざれば則ち族昆弟なり。未だ賢を進め不肖を退くを聞かず。是れ君を蔽ひて賢の路を塞ぐなり。賢を知りて進めざるは、是れ不忠なり。其の賢を知らざるは、是れ不智なり。妾の笑ふ所、亦た可ならずや。」と。王悦びて、明日、王 姫の言を以て虞丘子に告ぐ。丘子 席を避けて對ふる所を知らず。是に於いて舍を避けて、人をして孫叔敖を迎へて之を進め使む。王以て令尹と爲す。楚を治むること三年にして、莊王以て霸たり。

楚の史書に曰く、莊王の霸たるは、樊姫の力なりと。

詩に曰く、大夫 夙に退き、君をして勞せ使むる無かれと。其の君とは、女の君を謂ふなり。又曰く、温恭朝夕、事を執りて恪有りと。此を之れ謂ふなり。

頌に曰く、樊姫 謙讓にして、嫉妬有る靡し。美人を

薦進して、己と處を同じくす。虞丘を非刺す、賢の路を蔽ふと。楚莊 焉を用ひ、功業遂に伯たり。

(韓詩外傳卷二)

楚の莊王、聽朝して、罷ること晏し。樊姫 堂を下りて之を迎へて曰く、「何ぞ罷ること晏きや。饑倦無きを得んか。」と。莊王曰く、「今日、忠賢の言を聴き、饑倦を知らず。」と。樊姫曰く、「王の謂ふ所の忠賢とは、諸侯の客か、中國の士か。」と。莊王曰く、「則ち沈令尹なり。」と。樊姫口を掩ひて笑ふ。王曰く、「姫の笑ふ所は何ぞや。」と。姫曰く、「妾 王を得て、尚ほ湯沐し、巾櫛を執り、衽席を振わすこと十有一年。然れども妾未だ嘗て人をして梁・鄭の間に之きて、美人を求めて之を王に進め遣めざらんばあらず。妾と列を同じくする者十人、妾より賢なる者二人。妾豈に王の寵を擅にするを欲せざらんや。敢へて私かに衆美を蔽ふを願はざるは、王の多く見て則ち娯しむを欲すればなり。今、沈令尹楚に相たること數年、未だ嘗て賢を進め不肖を退くを見ず。又、焉くんぞ忠賢爲るを得んや。」と。莊王 且朝に、樊姫の言を以て沈令尹に告ぐ。令尹 席を避け、孫叔敖を進む。叔敖楚を治めること三年、楚國霸たり。楚史筆を授きて之を策に書きて曰く、楚の霸たるは、樊姫の力なりと。

詩に曰く、百爾の思ふ所、我の之く所に如かずと。樊姫を之れ謂ふなり。

『列女傳』では、『韓詩外傳』と同様の話の前に、莊王が即位して政事に励むようになるまでの話（莊王位に即き、政事に勤む）が付け加えられている。莊王の逸樂を諷めた話は、『史記』『呂史春秋』など諸書に見られるが、諷めたのはどれも臣であり、樊姫の名が登場するものはない。

「王嘗て聽朝し……」以下は、話の展開の仕方など非常に良く似通っている。細かくその違いを見ていくと、まず樊姫の最初の質問に対する王の答えは、『列女傳』では「賢者と語り」であり、『韓詩外傳』では「忠賢の言を聴き」である。「聽言」は「與語」に、「忠賢」は「賢」に変えている。莊王はその人物を『韓詩外傳』では忠賢、『列女傳』では賢と見ていたことになる。これは、その後の文章でもきちんと使い分けられている。

樊姫の言葉「忠賢とは諸侯の客か、中國の士か」は、「賢者とは何ぞや」と短くまとめられている。次の莊王の言葉に固有名詞の置き換えがある。すなわち、「沈令尹」が「虞丘子」に変わっている。

「曰く、虞丘子賢は則ち賢なり。未だ忠ならざるなり。王曰く、何の謂ぞや」は、『列女傳』で新たに加えられた部分である。樊姫も虞丘子を賢だとは認めているが、忠ではないといっている。

その次の樊姫の言葉では、「王を得、尚ほ湯し、巾櫛を執り、衽席を振わす」は「巾櫛を執る」にまとめら

れ、「未嘗不」という二重否定も明確な肯定文に書き換えられ、「鄭衛」は「梁鄭」になっている。「同列者」と「賢於妾」の順番は逆になり、同列者の人数も「十人」から「七人」になっている。「妾聞く、堂上女を兼ねるは、人の能を觀る所以なり」とは『列女傳』にしかない。衆美（公）を蔽わないのは、『韓詩外傳』では王が嫉しむためであるが、『列女傳』では王が人の能力を見極めるためであるという。『列女傳』の樊姫の方が、王としての能力に配慮した女性という印象を受ける。沈令尹（虞丘子）が相となつての年数も「数年」から「十餘年」と多くなっている。「薦むる所は子弟に非ざれば則ち族昆弟なり」「是れ君を蔽ひて賢の路を塞ぐなり」は『列女傳』だけにあり、劉向によって補われた部分である。『韓詩外傳』では「焉くんぞ忠賢爲るを得んや」という反語で終わっているが、『列女傳』では「是れ不忠なり」「是れ不智なり」と明言している。虞丘子の不忠を王に諭す樊姫の態度はより強く読者の目に映る。

樊姫の言葉を王から告げられた虞丘子（沈令尹）の様子は、『列女傳』でより詳しく描かれている。「對ふる所を知らず」により虞丘子の動揺した姿が伝わってくるし、「避舍」では自分から身を引いたことが分る。「楚史援筆而書之於策曰」は「楚史書曰」に変わっている。

『列女傳』の方が断定的で事実らしく感じられる。

この伝と類似した話が、同じく劉向の作つた『新序』

雜事一にも見られる。これを『韓詩外傳』・『列女傳』と比較しやすいように、表に示す。

韓詩外傳	列女傳	新序
聽朝罷晏	聽朝罷晏	聽朝而晏
樊姬下堂而迎之	姬下殿迎	相応する記述なし
曰何罷之晏也得無曰何罷晏也得無飢倦問其故	乎	問其故
饑倦乎	乎	問其故
今日聽忠賢之言不與賢者語不知飢倦也今日與賢相語不知	賢相爲誰	賢相爲誰
知饑倦也	日之晏也	日之晏也
王之所謂忠賢者諸王之所謂賢者何也	賢相爲誰	賢相爲誰
侯之客欺中國之士	欺	欺
則沈令尹也	虞丘子也	爲虞丘子
樊姬掩口而笑	姬掩口而笑	樊姬掩口而笑
王曰姬之所笑何也王曰姬之所笑何也	王問其故	王問其故
妾得於王尚湯沐執	妾執巾櫛十一年	妾幸得執巾櫛以待
巾櫛振衽席十有一	年矣	王
然妾未嘗不遣人之遣人之鄭衛求美人進	梁鄭之間求美人而於王	非不欲專貴擅愛
進之於王也	也	也
與妾同列者十人賢今賢於妾者二人同列	於妾者二人	以爲傷王之義
者七人		

妾豈不欲擅王之寵妾豈不欲擅王之愛寵	故所進與妾同位
哉	者數人矣
不敢私願蔽衆美欲	妾聞殿上兼女所以觀
王之多見則媿	人能也妾不能以私蔽
公欲王多見知人能也	
今沈令尹相楚數年今虞丘子相楚十餘年今虞丘子爲相數十	也未嘗見進賢而退
所薦非子弟則族昆弟年未嘗進一賢	不肖也
未聞進賢退不肖	又焉得爲忠賢乎
是蔽君而塞賢路知賢知而不進是不忠也	不進是不忠不知其賢不知是不智也安得
是不智也妾之所笑不爲賢	亦可乎
莊王且朝以樊姬之王悅明日王以姬之言明日朝王以樊姬之	言告虞丘子
言告沈令尹	告虞丘子
令尹避席而進孫叔	丘子避席不知所對於虞丘子稽首曰如樊
敖	是避舍使人迎孫叔敖姬之言於是辭位而
而進之	進孫叔敖
叔敖治楚三年而楚	王以爲令尹治楚三年
孫叔敖相楚莊王卒	以霸
國霸	而莊王以霸
楚史援筆而書之於楚史書曰莊王之霸樊姬與有力焉	策曰楚之霸樊姬之姬之力也

この表を見てみると、『列女傳』と『新序』は、同じ劉向撰の文章でありながら、かなり違った記述があることが指摘できる。例えば、『列女傳』の「曰何罷晏也得

無飢倦乎」は『新序』では単に「問其故」とだけあり、同じように、「王曰姫之所笑何也」は「王問其故」である。この部分、『韓詩外傳』では「列女傳」と同様の表現になっている。また、中心をなす樊姫の言葉でも、「求美入進」「賢於妾者・同列者」「豈不欲擅王之愛寵哉」「欲王多見知人能」が語られる順序は「列女傳」と『韓詩外傳』で共通しているのに対し、『新序』では、「非不欲專貴擅愛也」「以爲傷王之義」「所進與妾同位者」のように変えられている。

しかし、ともに『韓詩外傳』に「沈令尹」とあるのを「虞丘子」としている点や、「聽忠賢之言」を「與賢者語」・「與賢相語」に変えている点、及び、『韓詩外傳』には相当部分が見られない「知賢不進是不忠不知其賢是不智也」・「知而不進是不忠也不知是不智也」という記述がある点などは共通している。

『新序』を『韓詩外傳』と比べると、『列女傳』との比較に比べて共通点はあまりない。『新序』は、『韓詩外傳』を素材に増幅して書き換えている『列女傳』を典拠とし、それを逆に削減しながら叙述的な表現に変えて書かれたと思われる。

この樊姫伝は、後漢最高の文人・学者の一人として名高い蔡邕の作った『琴操』という書の列女引にも次のように引かれている。

列女引者、楚莊王妃樊姫之所作也。莊王愛幸樊姫、

不敢專席、飾衆妾使更侍王、以廣繼嗣。莊王一日罷朝而晏、樊姫問故、王曰、「與賢相語」。姫問爲誰、曰、「虞丘子」。樊姫曰、「妾幸得侍王、非不欲專貴擅愛也、以爲傷王之義、故所進與王同位者數人矣。今虞丘子爲相、未嘗進一賢、安得爲賢。」明日、王以樊姫語告虞丘子、稽首辭位而進孫叔敖。樊姫自以諫行志得、作列女引曰、「忠諫行兮正不邪、衆妾誇兮繼嗣多。」

(平津館叢書本)

これを先の三文獻と比較すると、「罷朝而晏」「樊姫問故」「與賢相語」「幸得侍王」「專貴擅愛」「傷王之義」「稽首辭位」といった『新序』にしか見られない表現が多く用いられていることに気付く。「列女引」といっても、それは『列女傳』を意味するのではなく、むしろ『新序』を典拠にして作られた可能性が高い。

また、樊姫は登場しないが、沈(令)尹が孫叔敖を進めたという話が、劉向撰の『説苑』などに見られる。さらに、「魯漆室女」に關しても、『琴操』貞女引に次のような話が見られる。

貞女引者、魯漆(一作「次」)室女所作也。漆室女倚柱悲吟而嘯、鄰人見其心之不樂也、進而問之曰、「有淫心欲嫁之念耶。何吟之悲。」漆室女曰、「嗟乎嗟乎。子無志。不知人之甚也。昔者、楚人得罪於其君、走逃吾東家、馬逸蹈吾園葵、使吾終年不厭菜。吾西鄰人失羊不還、請吾兄追之、霧澗水出、使吾兄溺死、終身無兄。政

之所致也、吾憂國傷人、心悲而嘯、豈欲嫁哉。」自傷懷結、而爲人所疑、於是裝裳入山林之中、見女貞之木、喟然嘆息、援琴而弦、歌以「女貞之辭」云、「菁菁茂木、隱獨榮兮、變化垂枝、合秀英兮、修身養行、建令名兮、厥道不移、善惡并兮、屈躬就濁、世徵清兮、懷忠見疑、何貪生兮。」遂自經而死。
(平津館叢書本)

これを『韓詩外傳』・『列女傳』の記述と比較してみると、主人公は「魯漆室女」になっているから、『列女傳』を典拠にして書かれたことが想像される。「有淫心欲嫁之念耶」と言っている点も、適齢期を過ぎた独身の女を主人公にしている『列女傳』に通じるものがある。

しかし、漆室女の言葉に挙げられているエピソードを見ると、『列女傳』のみが典拠であったとは言い切れない。

まず一つ目のエピソードでは、「楚人得罪於其君走逃吾東家」というのは『韓詩外傳』の「宋之桓司馬得罪於宋君出於魯」に似ており、『列女傳』の「昔晉客舍吾家繫馬園中」とは異なっている。この部分は『韓詩外傳』をもとにしていると思われる。しかし、それに続く「馬逸蹈吾園妾使吾終年不菜」は、「蹈」・「使吾終年不菜」から判断して、『韓詩外傳』の「其馬佚而躐吾園而食吾園之葵是歲吾聞園人亡利之半」よりも『列女傳』の「馬佚馳走踐吾葵使我終歲不食葵」に近い。

他人や他国の争いがもとで起きた禍いが自分の身に降り懸かってきたことの例としては、「自分の家に泊まっ

た客の馬が、園を踏み荒らした」というのはあまり適当ではない。蔡邕はそのような考えの下に、この部分を『列女傳』の典拠である『韓詩外傳』の文章に戻したのではないだろうか。

二つ目のエピソードでは、『列女傳』の「鄰人女奔隨人亡其家借吾兄行追之」をもとにして、「吾西鄰人失羊不遺請吾兄追之」のように変えている。『韓詩外傳』でこれに相当する部分は「越王勾踐起兵而攻吳諸侯畏其威魯往獻女吾姊與焉兄往視之」となっており、劉向によって変更されたものに、さらに手を加えたことになる。

『琴操』では、「東(家)」と「西(鄰人)」、「馬」と「羊」とが対をなしているように見える。このような工夫からは、蔡邕の文才がうかがわれる。兄の死因については、『列女傳』と同じく「霧澗水出使吾兄溺死」である。ここでは「道而畏死」を「溺死」にした『列女傳』の記述を取り入れている。

こうして見てくると、文才と称せられた蔡邕の前には、劉向は必ずしも優れた文章家ではなかったと言えそうである。

四

本稿では、『韓詩外傳』との比較から、『列女傳』の文章の特徴を考察した。二で挙げた三つの特徴は、『列

『列女傳』の作成動機と深く関わっているように思う。『列女傳』は、宮廷内外における乱れを正し、漢室の安泰を図ろうとして成帝に上奏された書であり、「王者の教化は内より外に及び、近い者より始められる」という考えのもと、后妃・側室の婦道の確立のために作られた書である。そのような目的のために劉向は、「母儀」・「賢明」・「仁智」などの篇目にふさわしい女性の話を諸書より集め、それを中心に置いて、さらに諸書の素材と彼の創作によって肉付けし、それぞれの篇によりふさわしい女性として描き出そうとしたのである。

基本素材をいかに工夫して、篇目にふさわしい女性として主人公を描くかということは、『列女傳』編纂にあたり劉向が最も力を入れた点であろうと思われる。史実に基づいたものであるかどうかは、さほど問題ではなかった。固有名詞の置き換えが多いのは、このためである。

また、直接彼女たちの口から語られる言葉は、その人物を描く上で重要な役割を持っていた。主人公の言葉に改変が多いのには、こうした要因が考えられる。

さらに、『列女傳』に登場する女性たちは、劉向の代弁者としての役割を担っているとと言えるのではないだろうか。主人公の言葉はそのまま劉向の伝えたかった言葉であり、そのために「君子云々」「義士云々」といった女性らしからぬ堅い表現もしばしば用いられ、そう言っ

た言葉は男性に対してこうあるべきであるという道を示していることが多い。『列女傳』は女性たちの教訓集ではあるものの、男性に対しても生き方を説き、また、女性の力を侮るなかれと注意を呼び掛けているようでもある。

『列女傳』と『韓詩外傳』とを比較し、改変されている部分を明らかにすることを通して、『列女傳』の文章上の特徴をつかむと共に、劉向がこの書を作った目的を彼の創作表現の中から感じ取ることができた。

(あさかわ ふさよ 大岡村立大岡小学校教諭)